

## 『 嫌われる勇気 』

(岸見一郎・古賀史健 ダイアモンド社)

この本との出会いは私の前任校(須賀川高校)での箭内寿之監督との出会いにあります。箭内監督は言わずと知れた読書家であり、監督・部長で過ごした2年間でも遠征先に行く車の中、試合前、試合後など様々な場面で本を読んでおられました。それまでは私は“本”というものにあまり興味がなく、読んだとしても野球に対しての技術本程度でした。箭内監督に一度だけ、「本ってそんなに良い物ですか?」と聞いたことがあります。すると、「良いというか…俺にとっては呼吸と同じ!読まない生きていけない。」と答えて頂きました。監督がそこまで言うのなら自分も本を本気で読んでみよう。そんな考えで何気なく本屋に立ち寄って出会ったのがこの一冊です。

高校野球の指導者だけに囚われず、教員は様々な感情を持って選手に接することと思います。そんな中で本に出会った当時、そして現在も“生徒との関わり”での悩みは絶えません。今後もその悩みが消えることはないと思いますが、今までなかった視点で参考になったのがこの本です。以下、印象強く頭に残っている内容を要約して紹介させていただきます。

### ～人は常に「変わらない」という決心をしている。～

人は少しくらい、不便で不自由があってもいまのライフスタイルの方が楽であると考えており、新しい自分に何が起こるかという不安に怯えている。つまり、変わりたいけど変わることが怖い。人は変わることによって生まれる「不安」と変わらないことでつきまとう「不満」を天秤にかけている。

### ～課題の分離～

例えば、子供が勉強しなかったらどうするか?おおよその考え方はあらゆる手を使って子供が勉強するように試行錯誤する。しかし、そうした強権的な手法で勉強させられた結果、子供は勉強が嫌いになる。また、最終的に勉強ができるようにはなりにくい。勉強するという課題、それは大人の課題ではなく子供自身の課題である。我々は「これは誰の課題なのか?」という視点から、自分の課題と他者の課題とを分離していく必要がある。そしてあらゆる対人関係のトラブルは、他者の課題に土足で踏み込むこと。あるいは自分の課題に土足で踏み込まれることによって引き起こされる。本人の意向を無視して「変わることを強要したところで後に強烈な反動がやってくるだけ。

### ～「信じる」、信用と信頼の違い～

「信用」とは条件付きの話であり、英語でいうところのクレジット。例を上げれば銀行でお金を借りるときに銀行は「あなたが返済してくれるなら貸す。」という対応をします。これはあくまで条件付けの話。

「信頼」とは他者を信じるにあたって、いっさいの条件をつけないこと。たとえ信用に足りるだけの客観的根拠がなかろうと、信じる。担保のことなど考えずに、無条件に信じる。それが信じる。

この本に書いてある全てを現場に生かせるとは思いませんが、その他にも参考になる内容が多く記されています。一見、題名だけをみると「嫌われる勇気」とあるように他者から嫌われるように生きるという意味に捉えられがちですが、決してそうではなく、人との関わりの上で物凄く的を得ている内容です。

最後に、“本を読む”というきっかけを与えてくださった箭内寿之監督に心から感謝致します。